森田の森のサンコ狐

みーちけ話しこだ。

むかしあるところに、安田さんというさむらい居であったどやな。そのさむらいさんが、役所だやらどっかの帰りに、小さい川越えねばなねくて、川っこ越えようとしたば、きれいな姉さんが絣の着物着て、姉さんかぶりの手拭かぶって、洗い物してあったって。ああええおなごだごどと思って、そご通って行って、家さ行ったけ、後つで来たやら間もなくそのおなごも入ってきて、

「私のどご嫁っこにもらってけねでろが」

って言わえで安田さんも、きれいなんだし、

「あい、もらいます」

ってもらって夫婦になって仲良く毎日暮らしていで、ある時安田さんが、時でねだけ早く帰ってきたけ、表で赤い狐が日向ぼっこしていたっけて。あれおかしな、おかしなと思っていたば、ちゃんと安田さん入れば、またええりっぱなあねさんになっているし、おかしなと思っていたって。そのうち子ども、男の子生まれて、童子丸とつけたって。その童子丸に毎日乳飲ませてけるし、そしたばまたあるとき、どうとながまっているし、おや変だなって思って、安田さんが狐だということわかったば、それから居なくなってしまって、その子腹へれば乳飲みたくなって、泣けばなんとも仕方ねだし、安田さんが役所さも行がえねし、その子どこおぶって、家の中じゅうこうまわってまわって、だましていたば、障子さ、

童子丸泣いだら、篠田の森さ訪ねでいって書でであったでおな。そいでこだ、はあ、せば篠田の森に居だおだなって、篠田の森さその子どごぶって行ったば、大きた赤い狐居で、どうとながまって、そしていたはで、

「そんたざまで、なんとするなだ」

って安田さん言ったば、またちゃんと姿かくして、きれいだ絣の着物着て、姉さんかぶりになって、またその子さ乳飲ませて、そしていであったとやって。

そいて、短け話だはて、そえでとっぴんからりのさんしょの実。